

研 究 分 野	資源生態、資源評価、漁場環境	部名	資源開発部
研 究 課 題 名	サケ・マス増殖管理推進事業 ーサケー		
予 算 区 分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H6～H19		
担 当	吉田 雅範		
協力・分担関係	内水面研究所		

〈目的〉

本県のサケ資源の増大を図るため、放流適期調査及び効率的、効果的な資源造成計画を作成するために必要な調査を行う。

1. 回帰資源調査：親魚の来遊構造や特性を明らかにし、来遊予測のための基礎資料を得る。
2. 移動分布調査：放流適期の把握及び放流初期の減耗要因、移動経路等を把握することにより放流技術の向上（効率的放流方法）について検討する。

〈試験研究方法〉

1. 回帰資源調査

回帰親魚尾数の把握と、既存資料を使った予測手法の開発及び精度の向上、及びサケ親魚回帰時の太平洋沿岸域での海洋観測の実施（9～12月まで月1回）。

2. 移動分布調査

1) 標識放流種苗の追跡調査（放流河川：赤石川さけますふ化場）

放流月日 3月上旬放流群：2007年3月2日、4月上旬放流群：2007年4月2日

放流尾数 3月上旬放流群 10万尾（1.21g）、4月上旬放流群 10万尾（1.43g）

追跡場所 小泊沖（光力利用敷網）、今別沖（定置網混獲等）、白糠（イカゴ棒受網混獲）

〈結果の概要・要約〉

2007年漁期の各海域での沿岸漁獲尾数は、太平洋 106万尾（昨年比 89%）、津軽海峡 23万尾（前年比 74%）、陸奥湾内 0.4万尾（前年比 59%）、日本海 10万尾（前年比 75%）、県全体では 140万尾（前年比 85%）であった（図1）。

2007年の太平洋海洋観測では9月にわずかに親潮系水をとらえただけであった。気象庁及び独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所の観測結果は次のとおりであった。親潮第1分枝は9月以降やや北偏で推移した。日本東方海域における親潮（深さ100mの水温5℃以下の領域）は8月以降大きく後退し、11月以降、1997年12月以来の弱い勢力となった。津軽暖流の下北半島東方への張り出しは、9月が平年並みであったが、10～11月が極めて強勢で推移した。これらのことから、今漁期、特に10～11月の漁場環境は、サケが青森県沿岸に寄りつきにくいものだったと考えられた。

2000年～2007年の標識稚魚の追跡調査から小泊沖で再捕された3月上旬放流群は、再捕できた全ての年で全長80mmを越えたが、4月上旬放流群は2000～2002年春放流群で全長80mm以下であった。このことから、この海域では3月上旬に放流した方が沖合移動期である後期幼魚（尾叉長80mm～120mm）に達する割合が高いと考えられた。

〈主要成果の具体的なデータ〉

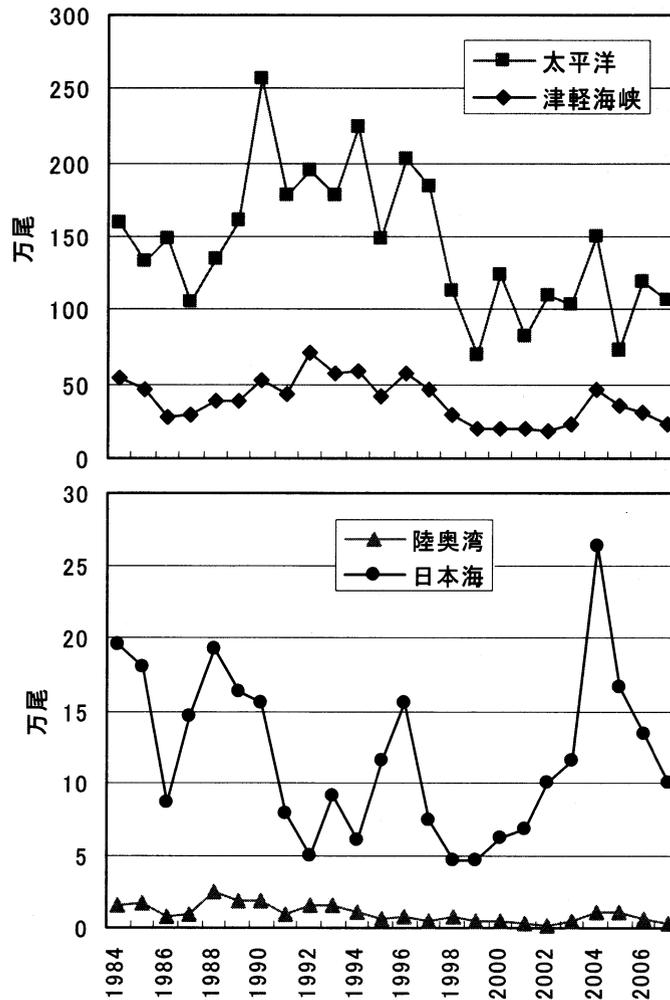


図1 沿岸回帰サケ親魚の海域別年変動

〈今後の問題点〉

- ・予測手法の確立と回帰資源評価

〈次年度の具体的計画〉

- ・本年度で調査を終了する。次年度は他機関のデータを使用し、来遊予測手法の開発及び漁獲量変動の解析を実施する。

〈結果の発表・活用状況等〉

- ・各種報告会における結果の発表
- ・地区さけます協議会での学習会で活用
- ・学習会（東通村）における来遊資源予測